

C型肝炎訴訟

今年の大きな問題のひとつが C 型肝炎「被災者」の救済問題である。・・・そして裁判に勝った負けたよりも、患者救済に示談金を支払う話になってきた。

それとわかっていながら製造販売してきた製薬会社（ミドリ十字。この創設者は旧 731 部隊の生き残りである。）が悪いのだが、許認可したのは厚生省で同罪である。そして次々と旧悪が露見してきた。大阪高裁が和解案を提示したが、福田総理はあまり知らないのか興味がないのか、諮問委員会のようなものに作業を急がせています、というのみである。だから、ずれた発言がでてくるようである。たとえば国に責任はないのに認めるわけにはいかん（総理の言葉ではないが）、というようなもの。・・・福田さんは、「人命は地球より重い」などとたわけたことを言って世界中に恥を晒した元総理の秘書だったじゃないか。問題の捉え方が雑すぎる。

医者の方にも問題がないわけではないが、血液製剤のみならず、どのような材料でどのような過程で製品になっているのかはわからないからである。だから厚生省を信じるしかないのであるが、たとえば米国でその種の問題が発生していたなら、一応注意はするべきであった。

HIV 訴訟のときには、金額はともかく、ミドリ十字の社長以下に土下座をさせた。これはどうかなと思うけれども、まあ患者側の溜飲はさがった。（サリドマイドのときにも、会社側は、座り込んだ患者団体をガードマンに排除させた。）

ところで、フィブリノーゲン製剤で C 型肝炎にはなったが命はとりとめたではないか、と思われる人もいるだろうからここで書いておきますが、お産のときの出血に対してフィブリノーゲンを投与しても出血はとまらない。まれにお産のときに DIC*をひきおこすことがあり激烈な出血傾向がみられることがあるのだが、フィブリノーゲンは**無効**です。輸血するよりも安全と思って投与した製剤が悪かったのである。結果的に出血よりもいやな新しい疾患をつくってしまったのである。（DIC：血管の中で血液が凝固してしまって、血液凝固因子が消費されてしまってほとんどなくなり、血管

が破れたときそこで血液を凝固させることができないもの。いつ脳出血をおこしてもおかしくない、難治性の出血)

このC型肝炎訴訟に対して国が控訴したとき、三宅久之さんが、舌をもつれさせながら激怒されていたのだが、全くそのとおりである。冒頭の示談金の話のときに、木っ端役人が「お払いするのは血税ですから」と言ったらしいが、ぶっとばすぞこの野郎！ たかが何億、何十億の単位ではないか。日本中の役所で隠し金としてプールしていたことを忘れたのか。遊興費に使っていたのではないか。社会保険庁は1兆10兆の規模で無意味な施設を建設して浪費していたではないか。防衛省は無駄金を使ってきたといわれるが、国防上やむをえないものは必要である。しかし、事務屋の守屋夫婦の個人的な遊興や娘の留学費まで面倒をみさせたという富貴な生活のために個人の会社の金を使うのはかまわないが、それによって国家として必要な機器選定が歪められたとしたら、罪万死に値する。結局は無駄遣いだらう。それを思えば、何十億などしれたものではないか。大体、機器を買うのももとは血税だらうが。

この原告団のすぐれているのは、(実は今までの多くの人がなし崩し的に有耶無耶にしてきた事実があるのだが、)全員救済といえれば当然人数が増える。補償総額がきまっているから人数が増えれば自分の取り分が少なくなる。それを承知していながら、「彼ら彼女らの要求は、保証金を得るために運動してきたのではない、二度とこのような薬害で苦しむ人が出ないようにして欲しい」であって、私利私欲のためではなかったことである。その点でいえば、国の観測はまちがっていた。いちばんうるさいのを懐柔すればいいじゃないか、などと思っていたのではないか。まああてがはずれたのであろう。そしてこの人たちの要求が真摯なものであったということである。感動的ですからあり、思わず応援したくなる話である。

2007. 12. 22.